

母校から

陸上競技部 土屋・小谷関東大会で活躍

— 全国大会へ今一步 —

顧問 久保 寺 忠 夫

現有部員六〇名を越える秦高陸上部。連日の早朝からの朝練習。一年中途切れる事のない試合の連続。そんな緊張感の中でお世辞にも素質に恵まれているとは言えない選手達が地道に練習を続け、着実に記録を伸ばして行く。努力・精進などと言うニュアンスが毛嫌いされる時代の流れの中で、走ることへの情熱を持ち続け夢の実現に向けて力走する部員達。今年それを立証したのが土屋と小谷の両名であった。土屋は中学時代全くの無名選手。五月の県大会では一〇〇mで三位、二〇〇mで五位、四〇〇mで四位と三種目入賞。女子短距離個人総合女王となった。関東大会では一〇〇mでコンマ二秒差

で全国に届かず。八月の国体予選では二位に入ったもの一〇〇分の二秒差で国体出場を逃してしまつた。小谷は中学時代水泳部。陸上を全く知らない子が五月の県大会三〇〇mで三位に入賞、九分五一秒で走り切り、関東大会は一〇位でこれまた惜しくも全国を逃したが目覚ましい活躍であつた。全国大会今一步の二人であつたがまさしく、「天才は有限、努力は無限」ということを立証してくれた。秋の駅伝では何と男女共に7位。『うそだろ』という言葉が幾度も脳裏を駆け巡つたが、男子は大健闘の七位、女子はエースが直前に交通事故にまきこまれるアクシデント。三位以内確実にあつただけに残念であつた。

その他各地区大会でも着実に入賞を果たし、私学がチーム強大し



小谷選手



土屋選手

てきている中で、厚木の県央駅伝では一〇年ぶりに男子優勝を獲得したのは立派である。

大勢の部員が一人一人持つ目標に違いはあれ、今もグラウンドで見守る伝統の力走の部旗のもと走り続ける選手達。その姿に安易に時代の流れに流されることのない強さと美しさを時に感じとります。

「秦高陸上部」を胸に部員達は本年も力走致します。新聞紙上を楽しみにOB各位の応援をよろしくお願い致します。

1995. 9. 20
広陵 第24号
から

忘れられない女子柔道部員たち

顧問 武藤 清 司

現在、女子柔道部員の数は三年

生を含めると選手10名、マネージャー4名の14名であり過去最高の人数となつている。女子の活躍としては、一昨年が県団体ベスト8、北相地区個人(48)で大津圭子が準優勝、昨年は県大会個人(48)で木ノ内優子がベスト8、北相地区個人(55)が南雲久美子が3位に入賞し練習の成果を見せた。思えば10年前に初めて女子が選手として1名入部し、その後一緒に入部したマネージャー2名が選手に転向し、ここから女子柔道部物語が始まることになる。残念ながら1人は途中で退部してしまふが残つた2人はむさ苦しい？男子部員とともに最後まで気持ちのよい汗をかいて卒業した。当時の練習は乱取り5分で10本、寝技も5分で5本と決められ、現在の連勝よりも長く、しのぎを削るようなきつい練習であつた。技術

よりも根性と練習量がすべてを決定するような柔道であり、ちなみに当時の男子チームは県ベスト8入りを果たし、その後公立高校のチームで8強に入ったチームは多い。

この二人の女子は時々泣いていますが、毎日休まず黙々と練習をこなし、逞しく粘り強い選手に成長し、遂には県代表として二人で関東大会出場を果たし顧問を大いに感激させてくれたものである。

蛇足ながら、一人は「リカちゃん」と呼ばれ明大に進学し、卒業後は全日空のスチュワーデスになり今も大空を飛び回っている。

もう一人の「ユキノちゃん」はホテルオークラに入社し、三年間のオランダ勤務を命ぜられた時、忘れずに柔道着を持参したそうである。

昔も今も変わらず辛い時はよく泣くが、いつも明るく、仲がよく、笑顔のさわやかな女子柔道部員たちの今後の健闘を期待したい。